脱獄参謀

安部光男著

参　　謀

安部光男著

日本文芸社

読者の皆さまにお願い

私たち『日本文芸社』は常に、あらゆる人びとに愛され、親しまれ、そして何らかの指標となり役立つ本でありたいということを願って、編集に心をこめておりますが、この上とも皆さまのご満足にこたえるよう、ご希望なりご意見なり、またお読みになりたいとお考えのものがございましたら、左記あてにどしどしお寄せくださるようお願いいたします。

なお、どの本につきましても、誤植や乱丁のないように努めておりますが、もし誤りの個所にお気づきになりましたら、ご職業、年齢などをお書き添えのうえご教示くだされば、まことに幸甚に存じます。

東京都千代田区神田神保町二ノ三四
日本文芸社

脱獄参謀 ¥280

昭和40年3月20日 発行

著者承認
検印省略

著者 安部光男
発行者 浅沼勝太郎
印刷所 株式会社ナガナエ印刷

発行所 東京都千代田区神田神保町2の34 株式会社 日本文芸社

振替口座東京73081 電話(261)3427・1816・1823・0089
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。 山晃製本

参　　謀

安部光男著

日本文芸社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

はじめに

昭和十九年四月下旬、大勢すでに崩れかけたビルマ戦線の、第三十三軍作戦主任参謀を命ぜられた私は、主として北緬方面の作戦計画と指導に当るうち、翌二十年八月、終戦の大詔をシッタン河口で多くの将兵とともに、悲涙をのみながら聞くことになった。

そして同年の十月、むろん、十三階段を覚悟はしていたが、辻政信大佐参謀ほか三人の参謀とともに、戦犯容疑でラングーン監獄に投獄され、まる百日間、独房のコンクリート壁に閉じこめられ、言語に絶する取り調べと、生きながらにして地獄の責苦を味わされた。

この非道に激憤した私は、この殺人あそびのオモチャになることをいさぎよしとせず、ついに脱走に成功して、竜兵団工兵部隊のあたたかい同胞愛につつまれ、一伍長に偽名変装して故国に潜行帰還したのである。

しかし、故国の土を踏んだとは名のみで、ここでも進駐軍から逮捕令がでており、再びその追跡ぶりを苦笑しながら、私は地下に潜行したのだが、これはその間の記録の一部である。

こうして二十三年、逮捕令解除がでるまでゆうゆうと地下にもぐっていたのだが、後に〝戦地の参謀は何をしていたのだ〟とよく聞かれたものである。

この言葉の中には強い非難と反感と叱責の意味が八割、好奇の眼が二割ふくまれているように私は受けとった。

それに対して、私はその責任を回避しようとか、逃れようなどとは毛頭しなかった。だから、叱責も非難も甘んじて受けた。決して自己卑下の卑屈感からではない。

その意味でこの本は自己の作戦指導の失敗も赤裸々にさらけだしたのだが、同時に世の人びとへの一参謀としての解答ともしたいのである。

だが、この書は偏きょうな民族意識にもとづく、個人的な反感としか映らない部分があるかもしれない。しかし、真相は真相であり、事実は断じてまげたくないのである。

また、今次の大戦によって日本自体も大きく転換したが、アジアの民族も目をさまし、白人の支配から離れてぞくぞく独立したことを思うとき、大東亜戦はアジア民族の解放だったともいいたい。

その意味で大陸に南方に、そして北辺の孤島に、祖国日本の勝利を信じて散った幾多の英霊に対し〃あなたがたが今日の日本をつくり、今日のアジアを独立させたのだ〃と心から叫んでその冥福を祈り、遺家族に幸多からんことを願うものである。

著　者

目　次

第一部　作戦参謀

ランゲーンへ飛ぶ……一〇
参謀長と大激論……一〇
この山下が骨をひろってやるッ！……一五
難物男の参謀長……一八
歓楽境に敵機の夜襲……二三
女中を抱く青年将校……二四
インパール作戦の展望……二九
東条内閣と牟田口将軍……二九
デッチあげられた作戦計画……三四
東京への道……三八
一瞬フッとんだ百式新型重爆機……四〇
太陽を失った日本軍……四三
敗残兵にひにくな贈物……四六
初陣の〝断〟作戦……五〇
新軍の誕生……五〇
神さま参謀現われる！……五三
応答むなし！　玉砕の二部隊……五六
竜兵団へ決死の連絡……五八
師団長から脅迫さる……六四
密林で山蛭とたわむる！……六九
熊笹の中に怪しい兵隊……七二
メイクテイラ会戦……七七
ビルマ軍の寝がえり……七七

凄絶たる宇賀部隊……八〇
白ダスキで必死の中隊長……八六
完全な袋の鼠……九〇
壮烈なヤメセン作戦……九三
行方不明の狼兵団……九三
兵隊からビンタをくらう……九六
老大佐消える……九九
三途の川の水はのめん！……一〇三
納屋でおこった珍事件……一〇六
必死の脱走行……一一〇
思わずふるった鉄拳……一一四

第二部　ラングーン監獄

終戦前夜……一一五
不吉な傍受電報……一一五
〝迷い児〟となった参謀……一一九
ビルマの顔……一二二
料理屋征伐……一二二
ワナにかかった辻参謀……一二六
個人感状をひきさく男……一三〇
作戦論で大喧嘩をやる……一三三
防空壕で王姫と抱きあう……一三九
「千挺の銃を」……一四八
菊の紋章のセンウイ土候……一五一
惨忍な米軍機の負傷兵虐殺……一五三
耳痛き御嘉尚の言葉……一五八
号泣して歌う〝海行かば〟……一六〇

狂える参謀……一六二
戦犯道中……一六八
敗戦意識を強要される……一六八
不敵なたくらみ……一七二
中央監獄の門をくぐる！……一七五
獄中で秘密連絡……一八三
拷問で血の刺青……一九〇
マレーの虎・山下大将の絞首刑……一九七
本多軍司令官との再会に涙す……二〇二

第三部　獄中見聞記

獄中の人々……二〇六
監獄のダニ……二〇六
獄中の夫婦ヤミ屋……二〇九
カーン中尉の好意にただただ頭をさげる……二一一
胆をぬかれた独立の歌……二一四
そんな映画はやめろ！……二一六
死刑囚黒人兵……二一八
程度の悪い英人兵……二二二
身を売る日本女性……二二五
台湾少年からお説教される……二二二
獄中でのクリスマス……二二二
独房の正月……二二五

第四部　はるかなる祖国

潜行帰還……二三六
エンボイ・キャンプ……二三八
黒人兵をだました大酒宴……二四〇
木村大将つれさられる……二四五
英霊を抱いて山中へ……二四六
脱走計画をねる……二五二
司令官と別離祖国へ……二五七

装幀　秋吉
挿絵　秋吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

第一部　作戦参謀

ラングーンへ飛ぶ

参謀長と大激論

雪と氷にとざされる東満牡丹江一帯も四月の声をきくと柳という柳がいっせいに芽をふきだしその新芽が一夜にして花が咲いたような美しさをみせる。

司令部三階の作戦室からみわたすこの春景色は、たしかにのどかで、平和そのものである。だが、大東亜戦の南方諸地域の戦況はもちろん、関東軍の第一方面軍が守備する牡丹江一帯からソ満国境は決して平和な春景色のようなものでなく、むしろ葬送式の送り花めいた不気味なものであった。したがって作戦室にはいつもなにかしら鋭い空気が充満していた。

「安倍参謀殿、参謀長殿がお呼びです」

「なにッ、用件は？」

「わかりません」

「用件がわからんで連絡伝令が勤まるか、はっきりせい……」

「はいッ、注意します」
「よし、すぐにいくといっておいてくれ」
罪もない伝令にたかが用務中に自分を呼びにきたからといって文句をいうほど、私ばかりでなく他の参謀連も同じだったが、妙に神経がとがっていたのである。
席をたって参謀室にはいると、四手井少将がムッツリと腕をくんで横をむいている。
「安倍参謀です。なにか……」
「うむ、坐れよ……」
その声がいかにも沈んで不気味にきこえる。それは私の気のせいであったかも知れぬ。だが、少くともそう感じた。というのも、私と参謀長の間には戦局のみとおしについては見解の差があったし、そのことで不興をこうむった事実があったからだった。
昭和十九年の三月である。
牡丹江司令部で満州第一方面軍司令官山下奉文大将を中心として、関東軍の作戦計画にもとづき、第一方面軍はどう攻勢にでるかの研究と作戦実施にたいする計画が極秘裡におこなわれた。
この日会同した各参謀の意見は多種多様であったが、三分の二ぐらいは機をみてソ満国境をこえ、一大攻勢にでる奇襲作戦の敢行という意見であった。
しかし私は情報参謀という立場からして、これはばかげた作戦意見だ、とまッ向から反対意見

をのべたのである。
なぜならば、情報を通じての大東亜戦の様相は、いかに優秀で世界にしられた関東軍部隊でも、連合軍においつめられている今日、ソ満国境をこえて攻勢にでる、なぞという作戦計画はおのれをしらざる机上戦術だ、と信じた見解をもっていたからだった。
実はこの会同がおこなわれる前にも、私はこうしたことで参謀長と大議論をやったのだ。
たまたまなにかの会食の席だったが、話が対ソ作戦にうつり、戦車か？　肉弾戦かという議論になった。このとき、私は、
「肉弾戦なぞと考えていたら参謀がつとまるか、ノモンハンであれほどの苦杯をなめながら、いまだに戦車、飛行機は恐るるにたらず、肉弾をもって攻撃すればことたりる、という観念をもっているからたいせつな兵隊を殺すんだッ、冗談じゃない、現在の関東軍はいかにしてソ満国境を守り、いかにして満州の治安をたもっていくか、ということが刻下の急務だ、それが今にしてなお国境をこえて攻勢にでるか、肉弾戦で勝をうるなぞと考えていたら、たいへんな頭だ、そんなのは士官候補生の考える戦術で、二年前の棚ざらし作戦だよ」
とどなった。そして、私は肚のなかではさだめし参謀長もまったく同意だろうと期待していると、案に相違して、眼から火のでるほど大喝された。
「なにをいうかッ、いやしくも世界有数の関東軍だ、そういう意見をこの席ではくとはゆきすぎ

たぞッ、取り消せッ！」

いきりたって頭からどなりたてる。なんたる意外な言葉であろう。私はムッとした。

「取り消せとはなんですか、これはあくまで安倍個人の意見です。つまらぬ作戦で陛下の将兵を失うようなことがあったら、この大東亜戦は存続できませんッ」

「ばかッ、なにがつまらぬ作戦だ！　だまれ！　その放言を取り消せッ！」

「なにがばかですか、では、閣下もこの肉弾筆法をお考えだったのですか……もしそうだったら全関東軍を意味なく大海に放りこむようなもんです」

「暴言をはくなッ！　無礼者！　許さんッ」

多少の酔もてつだって昂奮した私は、夢中で参謀長の言葉にくいさがった。

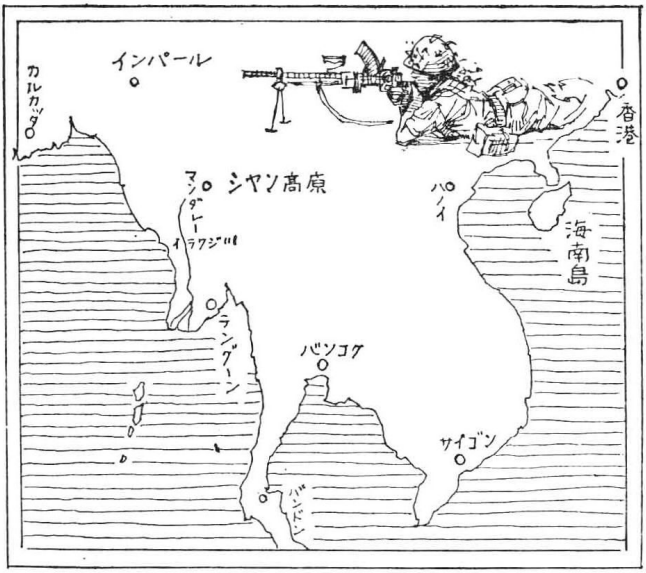
「待てッ、安倍参謀ッ、落ちつけ」

「やめろッ、ここは議論の会場ではないぞッ！　静かにしろ」

二、三の同僚参謀が左右から私をおさえる。

（なにをいうかッ、こんな阿呆くさい司令部に勤務ができるか、抗命罪でも上官侮辱罪でもなんでもこいッ、参謀なんかたった今からやめさせてもらう、中隊長でも大隊長にでもなって兵とともに暮した方がよほどいいッ！）

腹のなかでさんざん毒づいて私は部屋にもどった。すっかりふてくさって、その夜は遅くまで



自棄酒をあおっていると、推崎参謀が訪ねてきた。

「安倍参謀ッ、短気をおこすな……参謀長もああどなったものの、安倍は骨のある奴だ、第一方面軍としてよい参謀をえたといわれていたぞ……だが、今夜の貴様の態度はたしかに少々ですぎるぞ、俺が参謀長でもあれでは腹がたつ……こんどの参謀長だって根ッからあまい考えを持っているわけでない。場合が違うから怒ったまでだぞ……」

心から忠告してくれる。私もさすがに気が重かった。

「悪かったよ……明朝、参謀長にあやまる。貴様にも心配させてすまん……」

翌朝、参謀長の登庁を待っておわびすると、カラカラ笑って「昨夜の安倍は馬鹿にはりき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong